2020 年　あいち環境塾卒塾生地域実践課題活動報告

「耕作放棄地への桑の植樹を通じたネットワーク形成」

鈴木　友代（１０期生)、
協力者：都築政浩（１０期生）

はじめに

2016 年、あいち環境塾の内容を見て、素晴らしい講師陣の講座、環境に関する人材育成に惹かれて決断し、入塾に至った。

土曜日に受講できることが魅力で、第 10 期生として半年間、チームとともに切磋琢磨した塾生生活を過ごした。チーム活動テーマは「生物多様性」。社会性の大きな課題として取り組んだ。

もともと地域での活動（里山保全、環境学習等）で、ボランティアで取り組みをしており、その延長で、「桑」を耕作放棄地に植樹する活動に関わることになった。ちょうどそのころ、あいち環境塾卒塾生実践課題活動についての応募があり、挑戦することにした。

桑との出会い

近年、ハーブやアロマを学ぶうちに、身近な植物の恵みを心身の健康に役立てたいという思いが強くなっていた。

桑は別名「マルベリー」と呼ばれ、世界的にメディカルハーブの一種で、葉をハーブティとして利用されていることを知った。

2019 年、愛知県内で耕作放棄地に桑の木を植樹している「マルベリークラブ中部」という NPO 団体と出会い、活動内容に共感し入会した。

桑畑の今昔

蚕糸業が最盛期の 1930 年代、全国農家の約 40%にあたる 221 万戸が養蚕業に従事、桑畑面積は全畑地の約 1/4 の７１万 ha を占めていた。

2008 年には 1021 戸、桑畑は果樹園や住宅地に姿を変え、2011ha まで減少した。時代の変遷に伴い、2013 年から 25000 分の 1 の地図記号からも姿を消した。

1/25000
桑畑地図記号

愛知県の養蚕業（蚕飼育と桑栽培）は 1916 年（大正 7 年）では長野県についで全国２位であったが、現在では 1ha である。

（農林水産省：養蚕統計）

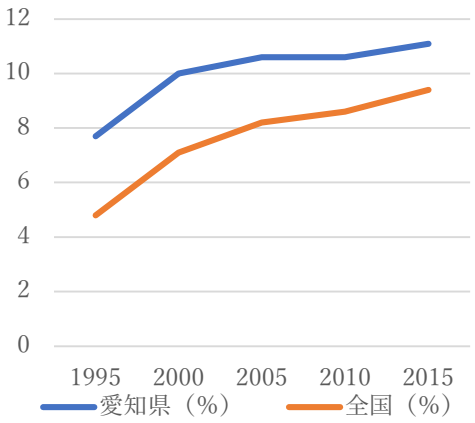
養蚕の「よ」の字も聞かれないくらい下火になっており、柿、梨、ブドウ、モモなどの生産へと変遷をしている。

耕作放棄地の現状

耕作放棄地とは、所有されている農地のうち過去１年以上作付けされておらず、この数年の間に再び作付けする考えのないもの。（遊休農地：農地法の用語　とほぼ同じ）

全国的な傾向として耕作面積が年々減少する一方、耕作放棄地面積は増加し続けており、耕作放棄地化の防止・解消が急務となっている。

愛知県でも耕地面積は減少し、耕地面積における耕作放棄地の割合は高止まりしている。全国に比べて愛知県の方が割合は高い。



耕地面積に対する耕作放棄地の割合

出展：農林水産書統計部公表　耕地及び作付け面積統計・農林業センサスよりグラフ化

2015 年時点で、全国で 42 万ha（愛知県の 8 割の面積）愛知県で 8500 ha（名古屋市の 1/4）となっている。

桑について

① 日本古来からの歴史・文化に深く関わる、無くてはならない植物とされてきた。
生薬として 1800 年前からすでに利用。神仙茶（桑の葉を陰干し）として滋養強壮用の薬草として利用されてきた。十七条憲法の第十六条には「桑を植えなければ何を着るの？」と桑の木の植樹を奨励し、喫茶養生記では飲水病（糖尿病）への桑葉の飲用の奨励と、日本人にとって身近な薬草であった。
現在も漢方の生薬として利用されている。実、葉、若枝、根が利用される。（根は桑白皮と呼び、専ら医薬品）

② 蚕の食草として日本各地で大規模に栽培されていた。（赤とんぼの歌２番の歌詞）
蚕の繭から作るシルクは保温性、吸湿性の優れた素晴らしい繊維である。マスクにも利用されている。医療分野での利用も進んでいる（手術用の縫合糸など）

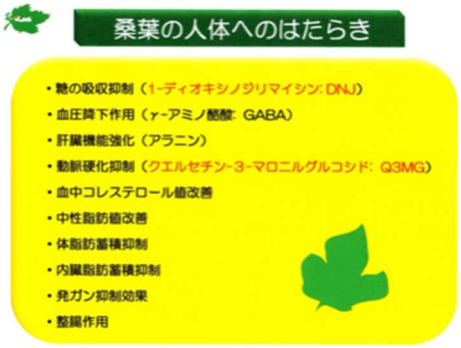
③ 数十年前はでは当たり前の風景（赤とんぼの歌２番の歌詞）で里山里地の構成要素であった。強靭な植物で栽培しやすく、気候変動にも強い作物であり、持続型農業との相性は優れている。一年で 2m以上も新たな枝が伸び、葉は２、３回収穫可能である。

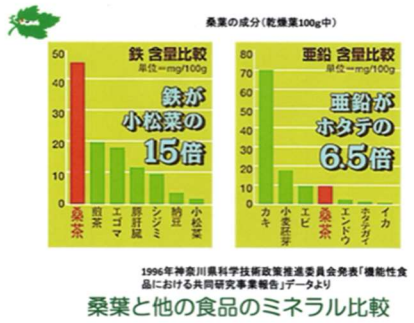
桑の木の植栽のすすめ

近年、未病を保ちたいという意識の変化などから、桑の葉（マルベリー）はメディカルハーブとしての側面から、食用としての利用が進み、特に食前に飲む、糖の吸収を調整してくれるお茶として脚光を浴びるようになった。

桑特有のデオキシノジリマイシン（DNJ）を筆頭に、食物繊維、各種ミネラル、たんぱく質を含み、機能性の高い健康食品として流通されるようになった。

桑の木は栽培が簡単で、若枝につく葉を 2～3 回収穫可能で、無肥料、無農薬で栽培することが可能であり、葉を安心して利用できる。近年増え続ける耕作放棄地で植栽し栽培する植物として適していると思われる。





岡谷市立岡谷蚕糸博物館資料：「桑の秘密」より抜粋

解決したい課題、目指すテーマ

① 耕作放棄地に桑の植樹活動するエリアを県内全域へ拡大する

NPO 法人マルベリークラブ中部は、2006 年より 14 年間に 8000 ㎡の耕作放棄地に桑の木を 1000 本植樹し、収穫した桑の葉を桑茶・桑パウダーに加工・販売している。桑・蚕・繭を使った環境教育プログラムを随時行い、地道に次世代へ伝え続けている。この間の地道な取組み、将来性については愛知環境賞 2021 にて優秀賞を受賞した。

ただ、耕作放棄地とのマッチングは知人による紹介に頼っており、地域が偏っており、豊田市内が活動の中心となっている。県内全域の耕作放棄地に活動を広めるにはどうしたらよいか？

② 賛同グループとの連携する

年々県内各地に賛同するグループは増えており、マルベリークラブ中部との一対一の交流は進んでいるが、他のグループ同志の交流の機会はあまり見られない。

桑の葉の利用、ループの構築のために、桑に関わる多様な主体がアイデアを共有し、協働創造していく必要がある。まずはそのための連携をどうすればよいか？

③ 栽培、収穫した桑の葉や実の利用を進め、地域の資源とする

現在は桑の葉をお茶に加工し、販売しているが、県内産桑の葉や実が栽培、利用し続けていくためにはお茶以外の利用の仕方を構築する必要がある。いろいろなアイディアを生み出したり、機能性の研究をするなど、地元の大学等との連携が必要な

のではないか？また、販売の方法についてもこれまでの常連客向けの販売方法に加えて工夫する必要があるのではないか？

活動内容・成果・反省点等

地域実践課題に参画する以前より、課題に対する取り組みを始めていた。

① 大学との連携

2019 年に地元の大学の研究テーマにするよう、働きかけ、名城大学農学部にて桑の葉の機能性についての研究テーマが実現し、2020 年 4 月より開始した。食品としての利用を視野に入れており、将来的に地域のブランド食品化を目指していくことを期待する。

② 地元で活動グループを設立

桑の葉の利用、ループの構築への多元的な連携をとりあうため、まず自らが連携グループの一つとなることで点から線、面、ネットワーク形成への足掛かりを作ろうと考えた。

2020 年 3 月、地元みよし市内で活動拠点を作ろうと決意し、地主さんを紹介してもらい、賛同を得た。メンバー14 名が集まり「みよし赤とんぼ倶楽部」をスタートさせた。まずは、300 坪の耕作放棄地に 30 本の桑の木を植えた。

その段階で、地域実践課題への取り組みが始まり、2020 年 7 月～2 月にかけて行った活動と成果を以下に記す。

① みよし赤とんぼ倶楽部の活動立ち上げ時のフィールドづくり

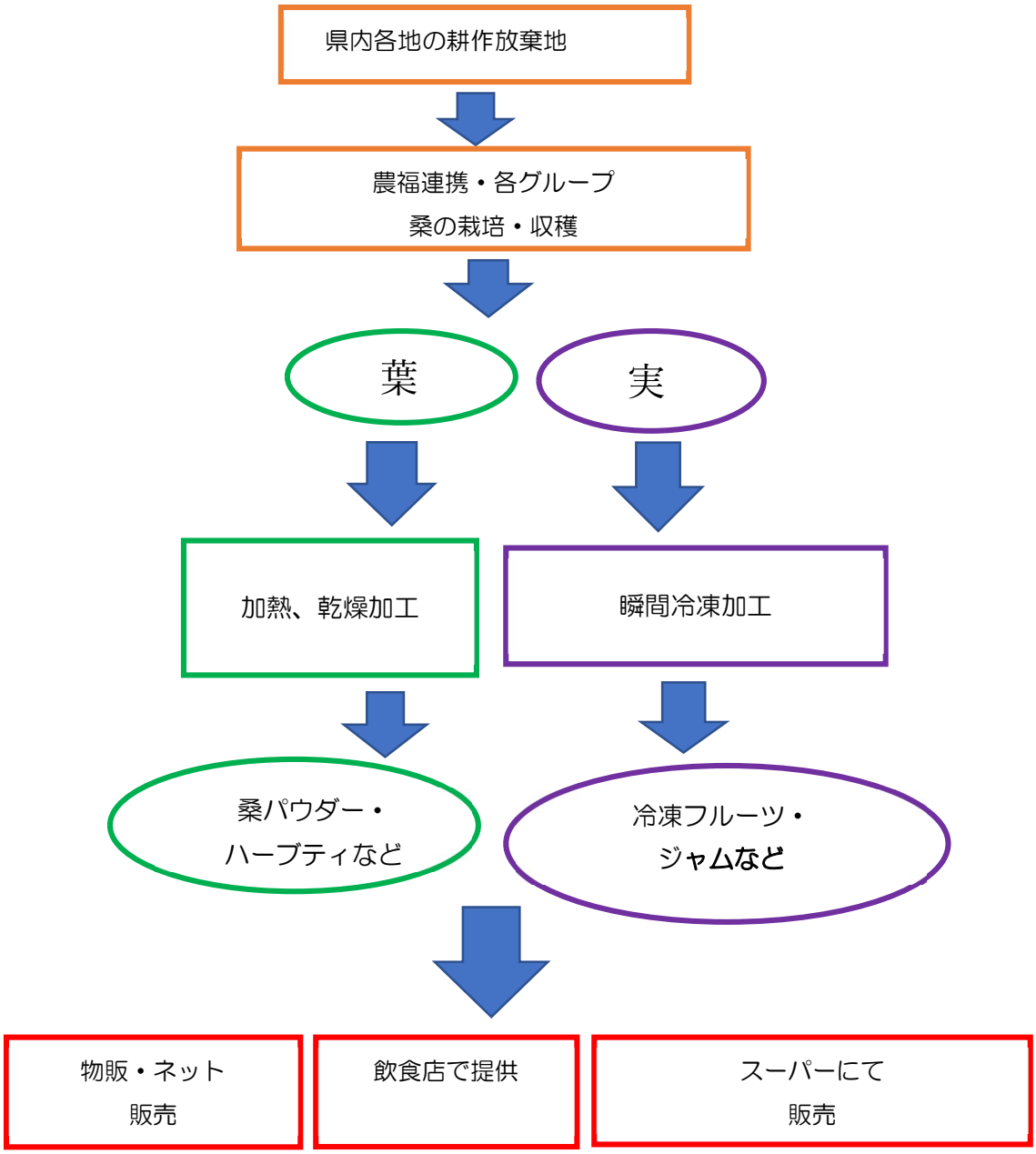
メンバーと打ち合わせしつつ、必要な活動備品の購入が出来たことで、今後の活動が継続していくことのできる体制を整えることができた。桑の葉は 2 年目から採取可能なので、お茶以外にどういった使い方をするのか、皆で模索したい。

みよし赤とんぼ倶楽部での活動風景

② 桑の葉・実の現実味のある事業化計画を作成（依頼）

地元で広く自然栽培のネットワークを構築している農業経営者に、提携スーパーへの流通に桑の葉や実の商品を加える案を作成してもらった。

すでに構築してある人脈を大切にして、今後はこの案を実現し、体によい商品を確実に流通させたい。



桑の葉・実の事業化計画案模式図

③ 桑の葉の成分分析（依頼）

桑の葉が文献等にあるような機能性を有するのか、日本食品分析センターにて分析依頼をした。その結果、桑の葉のみに入っている、デオキシノジリマイシンの含有、GABAや各種ミネラルや食物繊維の含有についても確認された。

名城大学との今後の連携によって機能性がさらに引き出されることを期待する。

④ 「桑フォーラム」企画、開催

桑に関わる多様な主体団体が一同に集まり、交流をする場として 2020 年 12 月 6 日にみよし市生涯学習センターサンライブにて「桑フォーラム」を企画、開催した。

折しもコロナ禍の中、感染症対策のため、会場の定員半数の２５名しか入場できず、規模は小さくなってしまったが、桑に関わる多様な人達が一同に交流でき、今後につながる１ページとなったことは幸いなことであった。

【プログラム】　　司会進行：鈴木、PC 担当：都築

★開会・挨拶 9：20

★講演　　9：25～10：20

「桑でつなごう！生物多様性から SDGｓへ」

長谷川明子（ビオトープネットワーク中部会長）

「自然栽培【桑】の可能性」

野中慎吾（農業生産法人みどりの里）

★事例紹介　10：20～11：00

「桑の魅力」

鈴木友代（みよし赤とんぼ倶楽部）：以降、パネルトークの司会担当

「NPO として愛知県産の桑と関わった 14 年間」

藤澤秀機（NPO 法人 マルベリークラブ中部代表理事）

「農福連携による桑栽培」

中本健太（社会福祉法人 無門福祉会　所長）

「お蚕さんと桑畑の復活と健康で丁寧な暮らしプロジェクト」

森川美保（繭のいろは）

「豊田市の伝統文化維持のための養蚕」

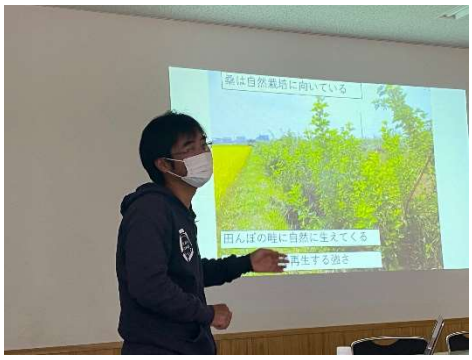
大林優子・都築浩一（とよた衣の里プロジェクト）

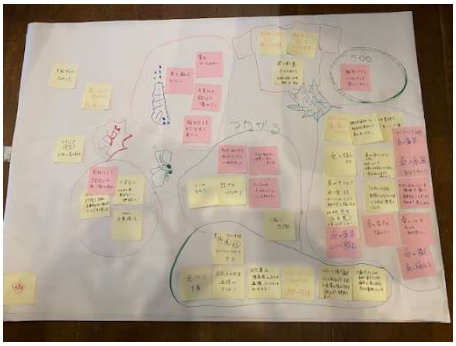
★休憩・桑茶の試飲・交流　11：00～11：15

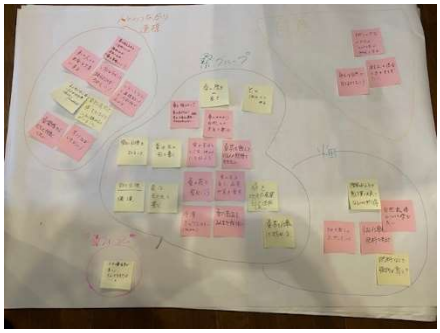
★参加者全員によるワールドカフェ（ワークショップ）　　進行：鈴木・都築

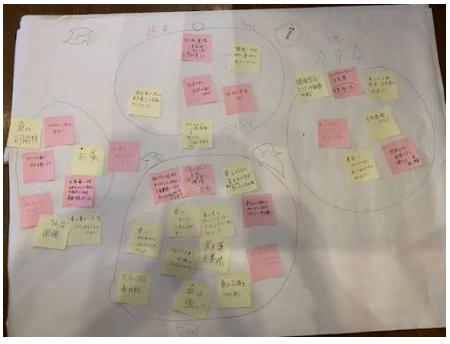
「今日の講演で気づいたことは何ですか？また、今日から何をしていきますか？」

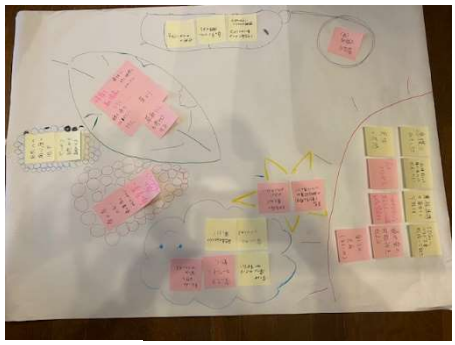
3．みんなでやろう！SDGs
SDGs(エス ディー ジー ズ)とは…


桑は自然栽培に向いている
田んぼの畦に自然に生えてくる
再生する逞さ









桑フォーラムの様子

回収したアンケートの一例を挙げる。新鮮なテーマであり、今後も継続を望む声が多くあった。

・素晴らしい取り組みだと思います。桑や蚕のことはほとんど知らずに生きてきましたが、衣食住、燃（エネルギー）、ケア（援けあい、保育、教育、医、介助）を自立、自給、顔の見える関係で繋ごうと思い活動してきた自分には、「衣」が空白でしたが、今日の出会いで開眼した！と思います。

身近なとことで桑を植え、カイコにも触れてみたい。

実現したい人と実現できる機会を繋ぐことも大事だと思います。

今日は本当に良かったです。続けて参加したいです。

・桑の活用の可能性を学びながら多くの人々に関心を持ってもらえるようになるといい。

連携の大切さを感じ、実際につながっていくための行動を考えていきたい。

持続可能な社会を考えていく必要性を感じています。

・桑は産業としてはまだ未熟であることが逆に善意で人が集まり、未来の可能性を共有できる、良いテーマだと感じました。薬の代わりになる食として、みんなで切り開いてみたいです。

・桑の素晴らしさを改めていろいろな方から聞くことができて、楽しいフォーラムになりました。ワールドカフェというワークショップも色々なお話を聞けて良い方法ですね。自分もSDG s の目標のもと、自然と接して、桑を育てる、畑で野菜を作る、桑のお茶を飲む、など実践していきたいです。素晴らしい会をありがとうございました。

今後の展開

今回の地域実践課題は、立ち上げたばかりの「みよし赤とんぼ倶楽部」の活動について実践した。今後はこの経験を軸に、親グループである NPO 法人マルベリークラブ中部が、愛知県内で桑の木を植樹し、その桑を地域の資源とて根付かせていくことができるように、協働活動に注力していく。

また、機能性など、学術的な知見からの桑の有用性を明らかにしつつ、桑をいう素材を活かして、愛知県の特産にしていくことも目標にしたい。

桑フォーラムのような交流の機会も工夫して毎年設け、協働の可能性を育てたい。多様性のある主体がその良さを互いに持ち寄り、地域循環の一助となるよう、活動を継続させていきたいと考える。